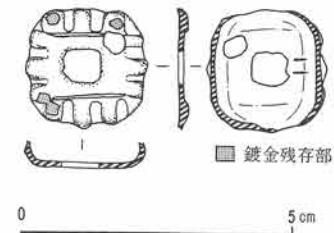


6. 鎌金金具 (第10図・図版VII-6)

2層より出土。現状は隅丸方形であるが、欠損しているため全容は知り得ない。中央に孔があり、縁辺部に舌状の打ち出しがある。銅製で鍍金されており、祭祀用具片と思われる。 (波田野至朗)



第10図 鍍金金具実測図

7. 石祠 (図版VII-8)

小丘部上に奉載されていたもので、本調査に先立ち御廟所参道の中程に移設されている。凝灰岩製で、高さ24.0cm・間口24.0cm・奥行10.8cmを測り、基壇・室・屋根の3つの部分から成っている。基壇には、正面に階段を・縁の回りに高欄を作り出している。室は正面及び両側面を開き、正面には両開の扉が付き、柱・梁が彫出されている。なお、扉の一方は、盛土の2層上面から出土している(図版VII-7)。屋根は基本的に入母屋造りであるが、屋根正面の流れの上面に、切妻のいわゆる千鳥破風を、また正面及び両側面は軒唐破風で飾っている。造りは総じて精巧で、基壇の一部が割れているものの風化も少なく、遺存度は良い。

(北村 亮)

V 総括

——下桐所在桐原石部神社御廟所の造営年代——

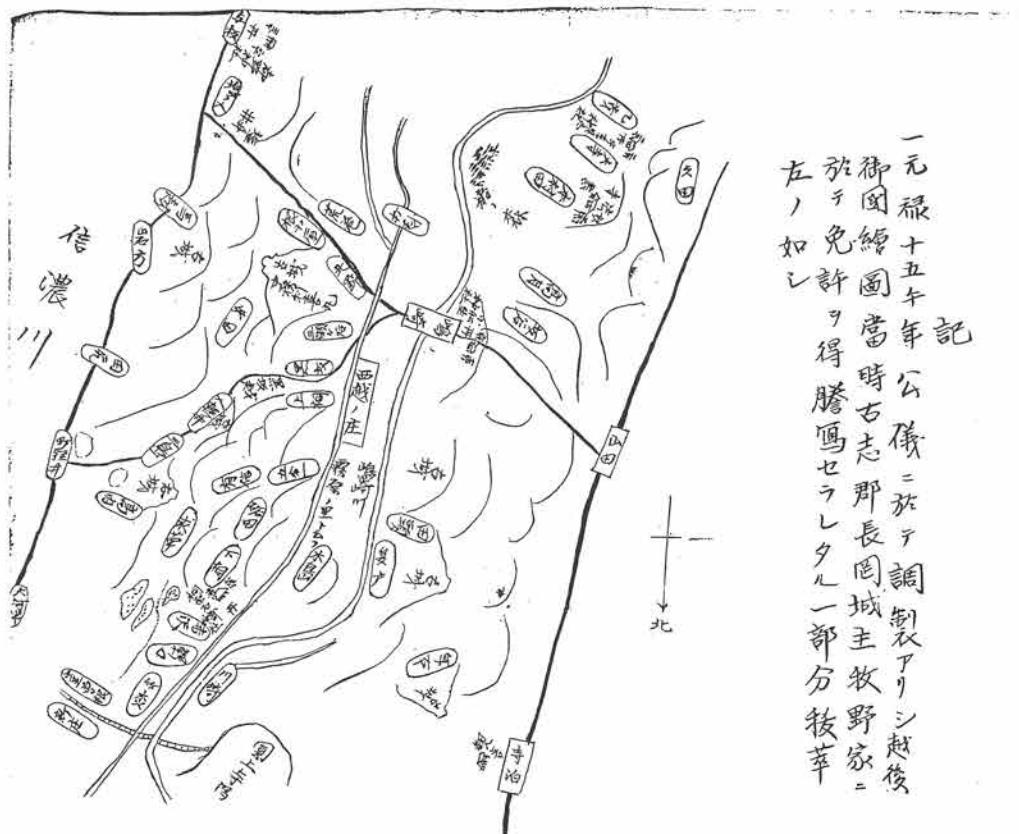
本御廟所の構造は、発掘調査によって知られた限りでは、方形壇状の平坦地を盛土と周辺の削り出しによって構築し、その一連の作業として中央に小丘部築き、小丘部上に石祠を奉載し、石祠の背後に松樹を伴なうことによって構成されていた。方形壇状部の各辺には榊がめぐっておりこれが磐境・小丘部及び石祠が神籬・松樹が憑代にそれぞれ該当するものであろう。本御廟所の形状が造営当初から現状のようであったかは、発掘調査からは不詳であるが、東側の開墾による整形や、西側の堆積土は、削土による御廟所の形状の変容を推測させる。ちなみに日野資徳氏は、本御廟所の旧状が「周圍式拾間餘ノ大塚ニテ老松老桜繁茂」しており「御キヤウ塚」と呼称されていたが、「明治八年周圍開墾ノ際採木シ塚上ヲナラス」ことによって変形したことを記録している〔註1〕。

調査結果と日野資徳氏の記録とを照合すると、遺構は削土後新に築かれたものではなく当初の「御キヤウ塚」の意図的な残存部であるとすることができよう。

本御廟所の造営は、下層盛土である5層及び7層からの寛永通宝の出土により、上限が最も新しい鋳造年である明暦2年（1656年）であり、下限が新寛永通宝の大規模な流通を考慮するとその鋳造開始の寛文8年（1668年）以前であった可能性がある。文久永宝の出土は、表土に近接した崩壊土5B層上面からであり、下限の比定資料とはしにくい。

文献資料については、宝暦9年（1759年）に当該地に「大塚」が存在していたというものがあるようであるが〔註2〕、原資料が不明であり確認できない。また慶長2年の「西古志郡下桐原村御検地帳」・慶長3年の「山東郡西古志郡之荘ノ内下桐村御検地帳」〔註3〕における村名の変遷や、神社・御廟所の状態等についても、同検地帳が調査しえない状態にあるため確認できない。また、元禄15年（1702年）に製作したとされる古地図（第11・12図）には、「延喜式内」・「御廟所」等がみえるが、字名・方位等から明治10年代末の地租改正時に作成された可能性が大きく〔註4〕、本地図の内容はそのまま採用できない〔註5〕。

石祠は、その製作が江戸時代中期以前には溯りえず〔註6〕、明治16年（1883）に提出された『神社明細帳』に記載されているものの規模よりかなり小さい〔註7〕。神社関係者の口碑



第11図 桐原石部神社藏古地図(1)

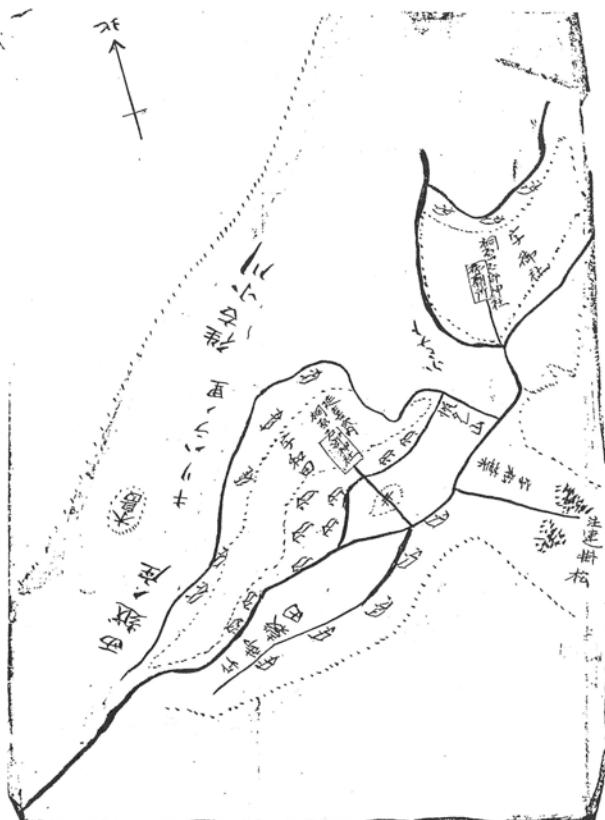
では、明治16年当時「木祠」であったものを意図的に「石祠」と届出、大正末年ごろ腐朽により現石祠に取り替えたという〔註8〕。

以上によれば、御廟所の造営年代を推定する根拠となるものは考古資料のみというが現状である。本地における御廟所の形成に、土師器や中世土師質土器等の出土もあるので、さらに溯古する可能性は残るが、現廟所の造営は江戸時代前期後半・1660年頃を上限になされたもので、直接延喜式内社の遺構と結びつくものではないと考えられる。「御キヨウ塚」が現御廟所と一致するものであるか否かは推測の域を出るものではないが、現在形・記録・周辺の塚の分布から同一のものとみられる。

また、塚上に当初から祠があったか否かは確証がない。樹齢60余年の松樹についても、植樹した桜が自生した松に淘汰されたためこれを神木とした〔註9〕もので、削土されたこともあるが、当初からの憑代の存在は不詳であり、当時の祭祀形態は知り難い。

桐原石部神社の成立は、この社名が『延喜式』にみられるところから、10世紀前半以前に溯古することは確実である。本地域はII章で触れたように、当時古志郡のうちと考えられ、島崎川下流域一帯を「キリハラノ里」と呼んでいるところから、式内社はこの一帯に存在していたものとみることができる。現在この地で桐原石部神社と称する社は、ここ寺泊町下桐と、隣接する和島村上桐にあり、いずれが「延喜式内社」であるかをめぐって論争が続いた。『神社明細帳』の記載内容〔註10〕や・このたび調査した御廟所の改造・山陵祭〔註11〕などは、当時の共同体の事情を背景としたものではあるまい。

ともかく、延喜式内桐原石部神社比定地問題は、越後国の成立・北越開発と駅制・横滝山廃寺などを含む総合的な見地からの検討が、今後も続けられることが望まれる。



第12図 桐原石部神社蔵古地図(2)

(波田野至朗)

- 註1・2・3 『桐原石部神社御由緒書逐條按文』（新潟県立図書館蔵）
- 註4 昭和56年2月19日、阿部洋輔氏御教示。
- 註5 牧野家原図は現在発見されておらず、比較できない。
- 註6 昭和55年1月14日、山崎完一氏御教示。
- 註7 「一、石祠 間口貳尺三寸三分、奥行貳尺三寸」、史料現称『新潟県神社寺院
仏堂明細帳』（新潟県総務部県史編さん室蔵）
- 註8・9 昭和55年12月15日、早川甚四郎氏御教示。
- 註10 両社提出の『神社明細帳』には、ともに「延喜式神明帳ニ記載ノ當社タル旨」
等と朱書加筆され、届出時の「式内」の二字は削除されている。当時の新潟県社
寺掛は、両社双方について式内社比定を避けている。
- 註11 「五月十五日 山陵祭 五社御稜ニ於テ大正十二年ヨリ祭典ヲ執行ス」・『祭
典ニ關スル書類』（村社桐原石部神社社務所蔵）

〔参考引用文献目録〕

- ア 青柳清作 1979 『寺泊の歴史』
- オ 岡本郁栄・金子拓男・家田順一郎・高橋陽子 1977 『寺泊・出雲崎』新潟県文
化財調査年報第16（新潟県教育委員会）
- カ 風間正太郎 1924 『桐原石部神社並神陵考』
金子拓男・駒形敏朗 1976 『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書（蛇
山遺跡）』新潟県埋蔵文化財調査報告書第6（新潟県教育委員会）
- サ 斎藤彦太郎 1924 『桐原御神陵誌』（靈蹟古墳保衛會事務支所）
- テ 寺村光晴・久我 勇 1960 『寺泊のおいたち』（寺泊町教育委員会）
寺村光晴・岩本圭輔・吉井 功・安藤文一・石井克己・一山 典・斎藤国男・佐
々木和博・波田野至朗 1977 『横滝山廃寺跡発掘調査概報（昭和51年度調査）』
(寺泊町教育委員会)
- ト 戸根与八郎・千葉英一・家田順一郎 1978 『国道116号線埋蔵文化財発掘調査
報告書（五分一稻場遺跡）』新潟県埋蔵文化財調査報告書第14（新潟県教育委
員会）
- フ 藤岡謙二郎 編 1975 『日本歴史地理総説 古代編』（吉川弘文館）